どうしてこうなった？

Ｔ・ｋ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうしてこうなった？

【Ｎコード】
Ｎ６７８７Ｘ

【作者名】
Ｔ・ｋ

【あらすじ】
ヌコをかばったらいつの間にかしんでたよ
これからどうしよう？

何でこうなった？（前書き）

とりあえず書いていこうと思います

何でこうなった？

レウスに跳ねられすぐはっき……違いますからね
とある人が…多分どこでもいるような人ですよね？
がたまたま飛び出したヌコをかばって車に跳ねられてポックリ逝っちゃいました
そして何故か転生したのがモンスターだらけのハンターの世界？
そんな感じで話が進めて行きたいと思います
初めての作品なのでいろいろとおかしな所があると思いますがどうかお許しを！！ついでにオリジナルな所も含みますのでご了承を
それじゃ話を進めて行きたいとおもいます！！

へ～

たまたまネコがとおりかかるのを見てた
たまたまネコがひかれそうになった
たまたまネコをかばってひかれた

「これ何ていう偶然？」

「面白い位の偶然だねｗｗｗ」

「ん？あんた誰？」

「オレは神様だよ～
マイネームイズゴッドー」

「あんたが神様なんだ～」

「そうだよ～」

早く話を進めろよ…

「天の声が進めろっていうから話を進めるよ～」

「話って何？」

「え～とね、君は善行を一定より積んだから転生出来るんだよ」

「へ～」

「まぁ、転生って言っても元いた世界に生まれかわる訳じゃないよ」
「え？どういう事？」
「つまり違う世界で別の生き方をすると言うことだよ」
「なるほど～」
「それで転生するか天国に逝くか」
「天国ってどんな所なの？」
「天国はね～…君が生きていた世界に近い所だよ」
「じゃあ転生がいいな」
「はいよ～…おまけ付けといてあげるよ」
「おまけ？まあとりあえずありがとな～」
「こちらこそ～
困った事があったら呼んでね
それじゃ転生させるからそこのベッドに寝ててね」
振り向くとなんかベッドあるし、しかもかなり大きいサイズ
とりあえず言われた通り寝てみた
「はーい、それじゃ目を閉じて
アイン、ツバァイ、ドライだったような気がする」

へ〜

ある村で子供が生まれた
生まれた子供は親から名を貰う前に全てを失った
それは偶然でしか無かった
たまたまあるハンターが古龍と戦っていた
古龍は傷つき逃げ出したがハンターは諦めず追い掛けた
そしてたまたま近くにあった村が襲われた
ハンターが着いた頃には村は崩壊していた
そしてハンターは古龍を倒して村に帰る途中で子供を拾った
ハンターはその後、狩りを辞めた
それから十年後、拾われた少年はと言うと・・・まぁとりあえず元気に育ちました。
え、十年間誰に育てられたかって？
もちろんあのハンターさんが育てましたよ

とりあえず（前書き）

書き方がわかりませんよ～（泣）
とりあえずごめんなさい

とりあえず

「なんか解説えらく適当だな」

「？…誰と話してる？」

「あ～なんでもないですよ」

俺が産まれてから十年の月日がたった
なんというかこの十年間の中で産まれてから数年はとても辛かった
飯だって一人で食べられなかったし、トイレは……とても死にたかった

『もういっぺんしんでみる？』

ああ、なんという、能登さん
じゃなくて神様
話がそれたみたいだから元に戻すが、身の回りの事が一人でできるまではとても大変だった
身の回りの事が出来るようになってからはというと暇を持て余した神々のように退屈だった
そんで今に至るというわけだよ
今はハンターさん…もとい母さんと一緒に飯食べてる最中なんですよ～
いやーうちの母さんすごい美人だよ～
胸はないけど色白で身長はまだ俺の方が低いけど後1位すれば俺と同じ位だろうな
凄いハンターだったらしいけど…どうみたって大剣持てるようには見えないな

一応倉庫にマスターブレイズがあったけど…持てるわけないよね～

「ごちそうさまでした～」

「お粗末さまでした」

あ～今日も1日暇つぶ「大変だあああ！！！！！」

なんだ？

気になったので外をみてみると

「リオレイアとリオレウス？」

何故いる！？

しかも亜種だよ～

あ、何人かハンターが出て来た

でも皆さん、その装備じゃちょっと…

どうみても勝ち目ないな

「ナナシ、逃げて」

あ、母さん…何で大剣持てんの！？…しかも片手で！！

「早く逃げてね」

あ～行っちゃった

とりあえず逃げますか

チラッと後ろを見たがレイアさん御愁傷様です

あれ？レウスさんはどこ行っグボラバァ

「ナナシ…ナナシ…」

母さん…そんな顔しないでよ
それにしても痛いな～
切れちゃいそうだよ
鬼人化発動！！
あ～ばれ～ましょ
アヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ

殴って蹴ってひきちぎる
おまけに尻尾もひきちぎる

少年暴走中～

気がつくと回りが真っ赤だったよ
いやー、怖いね～
これがあれか若さゆえの過ちか

「お～い、坊主大丈夫か～？」

あ～ハンターのオッチャンくるの遅いよ～

「なんか片ずいちまってるんだが…」

「皆片ずいた」

「お～天使ちゃん、ってかその大剣久しぶりに見たな～」

「十年ぶり」

「そんな昔だったか、いやー、十年ぶりに見ても不思議でしょうがねぇ」

「ですよねー」

あ～、体が痛い～

「ナナシ、大丈夫？」

「気ずくの遅いよ、母さん！！」

ピュー

あ、血があ～

バタン

「衛生兵！！じゃなかった救護班！！でもなかった誰かあああ！！」

…結局それかよ

薄れゆく意識の中で最後に思ったのがそれでした

とりあえず（後書き）

書き方がやっぱりわかりませんよ～

とりあえず意見、誤字、修正する場所などあったらどしどし送って下さいませ

とりあえず～

こにゃにゃちはー
いやー、レウスとレイア襲撃から一週間経ちましたが俺の体一向よくならないんですよ～
レウスの突進ほぼ裸で食らうと痛いんだね～
でも流石モンハンの世界
レウスの突進食らっても足の骨折、ふくらはぎのだんれつ、背骨がほぼ骨折、肺に何本か骨が刺さっていたり折れてたり、肩は脱臼と骨折でもちろん筋肉はボロボロ、後はその他もろもろの臓器が損傷、背中の肉が見えてるような状態だったけど古の秘薬を使い何とか一命をとりとげた。
よく死ななかったな…
その後、神様がオマケをくれたんだが…

「ごめんね～、最初から渡しとけば良かったね～（笑）」

「そういですよねー（笑）
おかげで体半端なく痛いですよー」

「ごめん～よ～（@ °▽ °@）
とりあえずはいこれー」

そういって渡されたのが

「携帯と紙？」

「そう携帯♪」

「これでどうしろと？」

「とりあえずその紙に書いてある番号を入力してみて」

言われた通りに入力してみるとぉー

「え？体が治った？」

「それ全快のチート
次のやってみ～」

言われた通り次のをやってみると

「何も起こらないんだが？」

「ポケットの中に入ってない？」

「はい？」

とりあえずガサゴソ探してみると

何・か・あ・る・な…

とりあえず取り出してみると、なんと！！

「ＡＫ－４７？」

「それBだね」
「Bってなに？」
「武器のはもう一個あるからやってみて、ちなみにそれがAだよ」
「ふーん…」
とりあえず番号入力だぁ！！
「今度は～……バット？」
「それAだよ～」
「は～…何かこれで俺も魔法のポケット持ちか～」
魔法のポケットは地味に嬉しい
「ちなみに先に言っとくけど残りは天候を変えるのと爆発アタアアアアクだね」
「先生、はい」
「はい、ナナシ君」
「その爆発アタアアアアアアクって何ですか？」
「2つアが多いですよ。
爆発アタアアアアクは殴ったものや武器で当てたもののが爆発する

しくみになってるんだよ」

「危な！？めっちゃ危な！！」

「人生に危険はつきものさ～」

「なんというワイルド…」

「とりあえず携帯にはこんだけ入れとけば大丈夫だね、後は君の体にどーん」

「ぎゃあああああああ」

普通に吹っ飛ばされた

吹っ飛ばされた先が何にもないから地面にキスをするはめになったよ

「これでいろいろと便利になったよ～」

「い、いろいろって何…」

「そのうちわかるよ～」

「さいですか…」

「じゃあおやすみー」

「おやすみー」

という夢をみた

起きたらポケットの中に携帯があった
夢じゃなかったあああ！！！！！

初めての狩り～（前書き）

大変更新が亀ですね

初めての狩り～

あっさっだっよ～
どうも皆さんおはようございます
朝の時間がやってきました。
どうしよう、体治ったのはいいがどう言おうか…

「はぁ～、どうしよう…」

あ～何か電話鳴ってるしどうしよか～
ん？電話？
とりあえず出るとしましょうか

「はい、もしもしどちら『やっと出たね～』何でしょうか、神様」

『実はね～大事な事良い忘れてたけど、君に渡した携帯ね、君以外に見えないから』

「あ～それは便利ですね」

『でね、問題はその先なんだけど、実はちょっと間違えちゃってさー』

「はぁ」

『チートで出せる武器あるでしょ？
それね、人が近くにいると使えないみたい（笑）』

「マジで？」

『マジやで～』

「まぁいいか、どうせ狩場なんて人いないだろうし」

『あれ？軽くスルー？そしてそれはフラグだよ』

「とりあえずまだ銃は使う事は無いと思うから大丈夫でしょ」

『あ～そうだね、そういえば多分ナイフとバットなら使えるはずだから～
きっと君ならなにかしら頑張ってくれる事を願ってるよ』

「何を頑張るんだよ？」

『それじゃーまたね～』

きられたよ…
一体何を頑張ればいいんだよー
それにナイフなんかあったか？
まぁいいか、寝よ「ナナシ、起きた？」

「あ～母さん、おはよー」

「村長が呼んでた」

「村長が？わかりましたよー」

「ナナシ…体大丈夫？」

「え？あ、うん～何か治っちゃったみたいだよ」

「……良かった」

母さん、そんな泣かないでよ
俺の体は大丈夫だよ～
だからそんなに強く抱き締めないでイタタタタタタタ！！
もう…だ…め

「……ナナシ？」

「大丈夫か～い？」

「……あ？ここ何処だ？」

「お～大丈夫みたいだね～」

「俺何でここにいるんだ？」

「そりゃ気を失ったからだよー」

「何故に？」

「ほら、天使ちゃんに抱き落されたんだよ」

「……そういえばそんな感じの事があったね…」

「君もつくづく災難な子だね～」

「別に好きで災難なわけじゃないんだけどな～」

「あはは、ドンマイｗｗｗ」

「あはは～笑い事じゃないよー」

「そういえばさ～今日の夕飯何にしようか悩んでるんだけど、何がいいと思う？」

「しらんがな～…う～ん青椒肉絲がいいと思います」

「青椒肉絲か～、わかった今日の夕飯は青椒肉絲にするよ」

「肉も野菜もあるしバランスいいはず」

「そうだよね～」

この後更に３０分ほど話は続きましたとさ

「それじゃーそろそろ帰るねー」

「あ～そういえば村長さん待たせてたんだよね。じゃ送るね」

……

そして俺は目を覚ますと

「母さん？」

「大丈夫？」

「大丈夫だよ～」

「…ごめん」

はぁ…恥ぃよ

「そんなに心配しなくていいよ～
ほらじいちゃんが呼んでたんでしょ？行こ～」

母さんの手を掴んで村長の家まで行ったよ
この年だとまだ普通の事かな？
でもこれはさすがに…恥ずかしいよ

そんな感じで村長の所まで来たが

「村長来たよ～」

「お～ナナシー腹へっとんのか？」

やっぱりボケてたよ

「村長、話」

「あ～ナナシ君だ～」

「メイさん、こんちはー」

メイさんは受付嬢の人でメガネかけていて胸がデカいとなると天然でぽけーとしている人だよ

「メイ、話何？」

「あ～そういえば村長さん話があるって言ってたね～
たしか…ハンターが不足しちゃったらしいのよ～」

「何で？」

「ほらこの前リオレウスとリオレイアの襲撃ですっかり自信無くしちゃって新人さんほとんど辞めちゃったみたいなのよ～」

「それで俺にですか？」

「そうなの～、村長さんが言うには凄い素質あるって言ってたのよー」

「はぁ、そうなんですか」

「あれ？そういえばなんでナナシ君動いてるの？」

「今ごろですか！？
…え～と、なんか治っちゃったみたいなんですよ」

「すご～い！！
お医者さんが言うにはもう一生動けないとか言ってたのにねー」

あれ？
俺そんなに酷かったのかよ！？

「お～ナナシー腹へっとんの？」

「ほら村長さんナナシ君呼んでたんでしょ？……ッフ！！」

「ごふぅ…」

あ…今殴ったよ
しかもおもいっきり
普通の人だったらあのパンチ見えないんじゃないのかな？

「メイ、駄目
年寄りいたわる」

「大丈夫だよ、天使ちゃん
この人いくら殴っても死なないから」

「そういう問題じゃないでしょ！？」

「お～ナナシ、よく来たな～」

「…すげ～、ボケ治ってるよ」

「村長、話」

「お～そうだの～
ナナシ、お主ハンターをやらないか？」

「いいですよー」

「え！？いいの？そこんとこどうなのお母さん？」

「駄目」

「だがお主ならわかるであろう？
ナナシにはハンターになる素質がある」

「でも駄目」

「母さん…俺強くなりたいんだ」

「…ナナシ」

「だから駄目かな？ハンターになるの」

「……好きにすればいい」

そう言って母さんは家に帰って行った

「あ～、天使ちゃんかなり怒っちゃってるよ」

「はぁ～帰ったら気まずいな～」

「いや～すまなかったの～、だがあの子もわかっておるはずじゃよ」

「じゃあ、ナナシ君ここに書名してね～」

「あ、はい…これって保護者の印が必要じゃないですか…」

「大丈夫じゃ、適当に書いといてもばれないからの～」

「村長さん～、駄目ですよそんなの、やっぱりここはちゃんと保護者の印をしないとー」

「今の母さんをどうやって説得すればいいの…」

「きっとなんとかなるよ！！」

「え？無責任すぎませんかー！？」

「あはは～、とりあえず頑張ってね～」

「どう頑張れと…」

しょうがないから歩いて家まで帰った

「ただいまー」

返事が無いただの…あれ？

「母さん？」

・・・

「何処いったんだよ…」

あれから探してみたが何処にもいなかった

「はぁ～、……ん？」

なんか書き置きの手紙あるよ

どうする？

A、読む

B、そっとしておく

C、とりあえず破く

うん、電話だ

……

「もしもし？」

『もしもし～』

「お～通じたよー、ってこんなことしてる場合じゃない」

『どうしたの？』

「実はカクカクシカジカダイ〇ツユメフェアミニキテネ」

『なんか変なのが聞こえたけど気にしないでおこう』

「それでどうしよう？」

『BとCは話が進まないからAですね』

「やっぱり？」

『うん、まぁBとCを選択しても面白そうだけどね～』

「俺は大変だよ…」

『まぁ頑張りなよ～』

「はいはい」

電話をきって手紙を開けた

[旅に出ます。]

・
・
・

ん？何これ？
旅に出るって何処に？
とりあえず～

「村長！！メイさん！！これ見て下さい」

ヤバイ、非常にやばい
母さんは昔から言った事は必ずやる人だから

「なに？」

「天使ちゃんショックのあまりに家出しちゃったの！？」

村長は平然としているがメイさんはかなり慌ててるようだ

「母さんの行きそうな場所何処だかわかりますか？」

「天使ちゃんの行きそうな場所ね～……わからないよ～」

「あやつの行きそうな場所といえば、お主の故郷位かの～？」

「俺の故郷ですか？」

「前に話たじゃろ？
あそこ位かの～」

俺の故郷か～
何処にあるんだよ？
「たしか森と丘の先にあるはずじゃ」
「わかりました、それじゃ～」
「それじゃ～ってナナシ君！？
1人でどこ行く気なの？」
「母さんを捜しに」
「そうじゃ、これを持ってけ」
ハンターナイフ貰ったよｗｗｗ
「村長あんがとね～」
「ふぁふぁふぁふぁ」
「え？村長！？いいの！？」
メイさんなんだか慌ててるし
「そんじゃ～、村長、メイさん行って来ますね」
「気をつけて行くのじゃぞ」
「ナナシ君、怪我しないでね」

とりあえず森丘に行きますか

……

「走れ、馬！！」

え～ただいま～馬に乗車中～
馬だから乗馬か～
そんな事はどうでもいいや

「母さん、何処いるんだよ？」

大変心配です
十年間一緒に暮らしてれば母さんの事は良くわかった
いつだって無口で無愛想だし、でも優しい
見た目は大人に見えないけど、中身は大人びてる
なんでもこなすけど、どこか危なかっかしくて
はぁ…俺も過保護なのかもしれない

「…なんでこんな時に」

なんか周りにいるよ

ギシャー
ギャー
ウギャー
ウホ

「最初の以外みんな悲鳴だろ…」

とりあえず、ポケットの中からコンバットピストルを取出し一番最後に吠えてたランボスに射つ

「ウホーー！！」

「この変態めが！！」

ナイスショットでした

「とりあえずおまえらも食らっとく？」

ギシャー
ギャー
イヤー

そのまま何処かに逃げてった

あ、馬に乗りながら発砲しても大丈夫だっけ？

「ビャアアアアアアア」

「ヤバ、暴れるなよ」

馬よ、言うことときいてくれ、じゃないと

「馬刺にするぞ」

「ビャ…アア」

よし、説得完了

……

「ここ何処だよー？」

ただいま絶賛迷子です

「銃が使えないって事はこの近くなんだけどな～」

もし、母さんだったらの話だけど

「なんだかな～」

母さん足速すぎですよ

しばらくすると肉を焼く匂いがしたのでとりあえず向かってみた

「あ、こんちは～」

「こんにはー」

「すいません、ここいらで白い髪の女…の子みませんでしたか？」

「その人なら会いましたよ、たしかあそこの山の頂上に行くとか言ってましたよ」

山の頂上…

なぜ山？

山籠り？

「ありがとございました～」

「あ、待って、君1人で行くの？」

「はい、そうですが」

「そんな装備じゃ危険過ぎる、俺も付いて行くよ」

フラグってこれの事か！！

「いえ、そんな迷惑ですし」

「大丈夫だよ、どうせ荷物届くのもかなり時間かかるし」

「あ…ありがとございます」

しっかり回収させて頂きましたよ、コンチクショー

山っ田あ～！！（前書き）

とてもむずかすい～ですよ～（T＿T）

山っ田あ～！！

あ～山田～
間違えた
山だ～
寒い～
何だか眠くなってきたよ、パ〇ラッシュ…

「大丈夫か？、あ～、ホットドリンク渡し忘れてた」

「もう、だ…め…」

意識が～飛んでくよ

「おい、しっかりしろ！！、お～い…

……

「神様～、俺また死んだみたい」

「うそ！？」

「多分凍死だよ（笑）」

「え…せっかく転生させたのに」

「いや、いくら体力回復チートがあって凍死は防げないでしょ？」

「そうだったか！！」

「え？、気ずかなかったの？」

「うん」

「馬鹿だね」

「違うよ、多少抜けているんだよ」

「あ～、そういえばそんな感じだね」

「でしょ？、とりあえずこれからどうする？」

「う～ん、まだいきていたいんだけど…あれ？」

「ねぇ、君まだ生きてるよ（笑）」

「やっぱり～ｗｗｗ」

「じゃあ送り返してあげるよ」

「ありがと～ね」

……

「おはようございました」

「生き返った！？」

「あれ？、ここ何処？」

「山の中にあった洞穴だよ」

「うお！？、あんた誰？」

「ほら、山に付いて行くって言ったハンターだよ」

「あ～、失礼しました」

「それにしても寒いな…」

「え？そう？」

「え？」

「え？」

「寒くないの？」

「うん、多分」

「ホットドリンク在るけど飲む？」

「飲みますー」

「……」

「どうかしました？」

「いや、なんでもない」

「？」

何か寒さ無効になってるよｗｗｗ
これはなんともまた便利なチートだよ（笑）

「それじゃ、先に行くか」

「はい～」

少年登山中……

「はー、いないな～」

「そうですね～」

はぁ、一体何処にいるんで「なぁ、あれって…」

「はい？……ドドブラ？」

「いや、あんな角生えて無いぞ」

……まさか

「ラージャン？」

「……一番嫌な奴が来たな」

まぁラージャンの方はこっちに気ずいて無いみたい……あ、気ずかれたー

「ギシャオオオーー！！」

「やばいな…とりあえず君は逃げてくれ」

「あ～…多分大丈夫ですよ」

「は？」

「それじゃあ、面倒なので行きますね」

狙うはラージャンの首
とりあえず首を切れば死ぬだろう、と願って
まずは一発目

「はぁ！！」

あ～、少しずれたかなー
やっぱり皮膚堅いな～

「何だか大丈夫そうだな～」

「あ～大丈夫ですから、バンバン射ってください」

ハンターさんが頑張ってラージャンの気を逸らしてくれたおかげで、
まぁラージャンは隙だらけになってくれた

「おもいっきり、逝ってみよう～」

今度は突き刺すように首を刺す
まぁ、少し入ってくれたから後は

「ねじ込む！！」

グリ

「チェスト！！」

使い方間違えてるような気がするが、気にしないでおこう

「おい、大丈夫か！？って血まみれ！？」

「うお！？、血まみれだ…」

「何処か怪我はないか？」

「無いですよ～、って事は返り血か～」

「良かった、それにしてもよくラージャンの首を切れたな」

「いや～、まさかハンターナイフが途中で折れたんで切れないかもな～、って思ってたんですよ」

「…よくやれたな」

「それより、早く母さんを捜さないと」

「あ、ああ」

その後、山を捜しても母さんは見つからず、山から降りてきた

「母さん…何処いるんだよ」

「すまんな、役に立てなくて」

「いえいえ、とても助かりましたよ」

「そうか、これからどうするんだ？」

「う～ん、他の場所を捜してみます」

「わかった、だがもうじき夜になるから、とりあえず休まないか？」

「休みたいですが、母さんを捜さないと、まだ近くにいる内に」

「よし、わかった
俺も最後までしっかり付き合うよ」

「え？、いいんですか？」

「まぁ、多少遅れても問題ない…と思いたい」

「ありがとうございますね」

そして母さんを捜しに森の中を進んでいきました。

山っ田あ～！！（後書き）

ちなみにハンターさんはガンナーですね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6787x/

どうしてこうなった？

2012年1月4日13時50分発行